



Title	フォークナーの周縁性：『行け、モーセ』における 主体概念再編の萌芽
Author(s)	松原，陽子
Citation	大阪大学言語文化学．1998，7，p. 147-159
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フォークナーの周縁性

—『行け、モーセ』における主体概念再編の萌芽—*

松原 陽子**

All through his fiction, William Faulkner designed to reconstruct his own subject which had suffered from the lost cause of the South. Creating his own fictional world, Yoknapatawpha, he apparently presupposed the concept of the subject as autonomous. In light of the recent theoretical debate on the subject, however, at the margins of his texts is a possibility of revising the concept itself. This paper aims to illustrate the immediacy of Faulkner's Modernist texts by analyzing the two different characters in *Go Down, Moses* (1942) in terms of their subject formation.

The white male protagonist, Ike renounces his patrimony to escape from the exclusive structure of patriarchy which he abhors. Nonetheless, because of his own adherence to the transcendental self accomplished through a rite of initiation in his youth, he unwittingly puts himself in a position to exclude Others. Ike's self-contradiction not only reveals his implicit complicity in patriarchy, but also betrays himself as an impotent subject. On the other hand, in spite of her secondary role in the stories, a black woman, Molly/Mollie is represented as a person who has a potential to resist the whole system of the southern society which has perpetually oppressed her. Molly's resistance comes from her own recognition that she is forced down into a marginal position as "the Other." Unlike Ike, however, Molly

*Faulkner's Marginality: The Revision of the Subject Foreshadowed in *Go Down, Moses* (MATSUBARA Yoko)

**言語文化研究科博士後期課程

never intends to get away from it; instead, she does remain within that system and attempts to undermine it from inside. Consequently, she very nearly succeeds in divesting the various white male discourses of their authority and appropriating them to speak in her own voice. It hints at the possibility for Molly to shape the enunciative subject by deconstructing the dichotomy of Self and Other.

This does not deny the general view that Faulkner may be identified with Ike; yet it is more important that in his texts concerned mainly with the constructing of the self-contained subject has been already inscribed the moment of revising it. Given the fact that Faulkner is from the South which has been marginalized in American history since its defeat in the Civil War, his whole attempt to reconstruct his subject implies a resistance to the historical mainstream. Thus, this inscription of the potential revision of the subject in the texts can be regarded as an expression of Faulkner's unconscious resistance from the margins.

I

William Faulkner は、1955 年のインタビューにおいて “I found out ... not only each book had to have a design but the whole output or sum of an artist's work had to have a design” (*Lion in the Garden* 255) と発言している。彼が南北戦争敗北以来その存在の拠りどころを失った南部出身者であることを考えれば、彼の一連の Yoknapatawpha 小説群の構想がフォークナー自身の主体性の回復であったということに、さほど大きな異論はないだろう。ただし、彼が続けて述べる “I created a cosmos of my own. I can move these people around like God” という言葉が示すように、ヨクナパトーフアという架空空間を作り上げたフォークナーが、自らの歴史を語ることが可能な権威者としての自律的主体 (Michel 90) を前提にしていたのは明らかであろう。

しかし、ポスト構造主義を発端とする近年の様々な理論において、このような

人間中心主義的主体の概念の孕む矛盾が明らかにされるとともに、主体概念自体を再考する動きが活発化されている¹⁾。フォークナー研究においては、1992年に出版された Philip M. Weinstein の *Faulkner's Subject* が、こうした昨今の理論的状况を踏まえ、フォークナーのテキストの中心にある白人男性の主体形成の問題を論じている。その中でワINSTAインは、フォークナーの世界における女性や黒人が、白人男性の主体形成のために他者として周縁化されていることを指摘しているが、この指摘自体に異議はない。ただし、物語の中心人物に注目するあまり、それらの主体を作り上げていくためにフォークナーが利用した引き立て役の登場人物たちをあまりに単一的に捉えすぎているのではないか、という疑問は残る。つまり、ワINSTAインの議論においては、フォークナーのテキストにおける周縁的立場の登場人物たちに宿る主体の可能性を問題にする余地がないのである。しかし、今日の主体概念の再編成に関する議論の流れからすれば、その萌芽はテキストの中心にではなく、むしろこの周縁部分にあるのではないだろうか。

よって本稿では、こうした脇役的登場人物を中心に読み直すことで、フォークナーのテキストに浮かび上がる主体の問題を考えてみたい。その際、具体的なテキストとして1942年に出版された『行け、モーセ』(*Go Down, Moses*)を取り上げることにする。この小説は、一般にモダニズム文学の代表作とされる『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*, 1936)で完成された形式上の統一を一旦解体し、すでに発表された短編に手を加えた7つの物語を寄せ集めた形態をとっている。出版当初は、*Go Down Moses and Other Stories*と短編集のようなタイトルがついていたのを、フォークナー自身の主張により第2版から現在のタイトルに改められたという経緯がある。これは、フォークナーが小説という形式に固執しながらもその定形を再構成しようと試みたことを示しており、主体概念の枠組みを再考する立場から考えても興味深いテキストであろう。また、物語の中心人物は白人男性 Ike McCaslin である一方で、この小説自体は、その脇役的登場人物である黒人女性 Molly / Mollie Worsham のモデルになったといわれるフォークナー家に仕えた Mammy、Caroline Barr (1940年没)に捧げられているという点も注目に値する。そこで以下では、特にこれら2人の登場人物、アイクとモリーに焦点をあて、それぞれの主体形成の過程を考察してみよう。

¹⁾ Martina Michel は、いわゆるポストモダニックな主体概念を再形成することに貢献してきた理論として、フェミニズムとニューヒストリシズムとともに、ポストコロニアル理論の重要性を挙げている (Michel 89-91)。

II

この小説の中核をなすのは、南北戦争直後に生まれたアイクが、荒野での狩りを通してイニシエーションを達成する様子を描いた中編「熊」(“The Bear”)である。10歳の時に初めて森に入ったアイクは、その翌年、その不滅性ゆえに神格化された大熊 Old Ben に独力で遭遇する機会を得る。時計やコンパスなどの文明品を取えて手放すことで荒野と一体になるアイクは、時間を超越したこの荒野という空間において自己を完成する。そしてこの超越性はアイクの中に内面化され、たとえ文明によって荒野が破壊されても、彼の記憶の中でその永遠性が保たれることが暗示されている。

こうして荒野で獵師としてのアイデンティティーを獲得したアイクは、父系の長男で唯一の白人であるにもかかわらず、21歳の時にマックスリン家の土地の相続権を放棄し、その後も子孫を残さずに老年に至る。つまり彼は、父から息子へと財産を受け継ぐことでその特権的立場を維持する「家父長制」のシステムによって自らを規定することを拒否したのである。こうしたアイクの態度は、彼が16才の頃に売店の「台帳」(ledgers) から知る祖父 Lucius Quintus Carothers McCaslin の犯した罪に関係している。キャロザーズは New Orleans で自ら買い付けた奴隷 Eunice と交わっただけでなく、彼女との間にできた娘 Tomasina (Tomy) とも交わり、結果的に2人を死に追いやったのだ。さらにアイクは、キャロザーズがトマシナとの息子 Tomey's Turl を認知することなく、1000ドルの遺産だけを彼に残してこの世を去ったことを知る。この祖父の非情な行為に対するアイクの驚愕 “So I reckon that was cheaper than saying My son to a nigger Even if My son wasn't but just two words”²⁾ は、家父長制と連動した人種差別に基づく社会そのものに対するアイクの嫌悪感を明らかにしている。つまり、黒人の血を引く親族を非嫡子として排除することで、白人嫡子として自己を定義するというのを、アイク自身が拒否したのである。

しかし白人優越的家父長制に対する彼の批判的態度にもかかわらず、アイクの権利放棄の行為が、逆にその制度を再強化する結果となっていることに注目したい。トミーのタールに対する祖父の不誠実さに対して倫理的な責任を感じるア

²⁾ William Faulkner, *Go Down, Moses* (New York: Random House, 1942; Vintage International edition, 1990), p.258. 以下、引用文の括弧内の頁数はすべて Vintage 版による。

イクは、各地へと散っていった彼の息子たちに祖父の遺産を渡そうと奔走するが、Thadious M. Davis はこのアイクの行為に隠された矛盾を鋭く指摘する。

Although his intention is to give his black kin their rightful share of the property left to them . . . , Ike does not recognize that his action replicates his grandfather's leaving a thousand dollars to Tomey's Turl, an act which Ike himself condemned: . . . (Davis 148).

アイクは、黒人の血を引く親族たちへの償いとして“*Fathers Will*” (257) に従い遺産を分配する。しかしそれは、「祖父の遺言」の執行を意味すると同時に、トミーのタールを息子と認めないとする「祖父の決意」を再度明確にすることでもあるのだ。このように、遺産を渡すことで台帳に記された彼らへの道徳的負担を帳消しにし、すべてを白紙に戻そうとするアイクは、逆に自らの手でその結果を台帳に記入してしまうことになる。この点に関して Minrose Gwin は、もともと奴隷制時代からこうした台帳が白人男性によって記されてきたことに注目し、アイク自身がそのイデオロギーの産出者であると同時にその産出物でもあると分析する (Gwin 88)。つまりアイクによる記入行為は、南部社会全体を支配している白人優越的家父長制のイデオロギーを再産出することにはかならず、アイクはたとえ彼の意に反していても、その権力を掌握する位置に自らの身を置いたことになるのである。

アイクが結果として彼の非難する社会制度に加担してしまう最大の理由は、彼が荒野で得た猟師としてのアイデンティティーに由来しているだろう。アイクの狩りの師である Sam Fathers が牡鹿に対して発する言葉“‘Oleh, Chief,’ . . . ‘Grandfather’” (177) は、彼の参加する一連の狩りが男性だけで行われる排他的な儀式であることを明らかにしている。さらに、様々な階級からの参加者たちは、たとえ荒野において社会的身分から解放されていても、猟師としての資質・力量という基準によって、再度序列化されている。つまり、アイクが自己完成を果たす荒野という超越的な空間は、それ自体排他的構造を有しており、その意味では彼が非難したあの家父長制となんら変わりのないものである。言い換えれば、他者を排除することで自己を特権化する社会システムを否定したアイクは、荒野においてそれと同じ原理に基づいた自己を作り上げるという矛盾に陥っているのである。

そしてこの矛盾は、「デルタの秋」(“Delta Autumn”)において、老年アイクがキャンプ地を訪れて来た女性と言葉をかわす中で噴出する。男装をしたこの女性は、彼らの会話の中で黒人の血を引いていると判明するが、Diana Roberts は、彼女が人種とジェンダー両方の境界を脅かしていることを指摘する (Roberts 85)。つまり、彼女はアイクの聖域であるデルタに侵入してだけでなく、南部社会に存在する人種や性別に関するあらゆる境界線を踏み越える存在でもあるのだ³⁾。その彼女に対して思わず “You’re a nigger!” (344) と声を上げるアイクは、‘nigger’ という言葉が表象する社会的また観念的領域へと彼女を囲い込むことで、自らの権威を保とうとする。要するに、彼の祖父がユニスとトマシナを法的にもましてや人間的にも正式な存在として認めなかったのと同様に、アイクは彼が自己同一の対象として神聖化しているデルタの地から目前の女性を追放することで、象徴的に自己を守り抜いたのである。しかし同時に、他者の排除の上に成り立つ彼の主体の無力さは、“I can do nothing for you! Cant nobody do nothing for you!” (344) と叫ぶアイクが、彼女との会話の間終始ベッドから起き上がることが出来ず、壁にかかった角笛を彼女に手渡すことさえ出来ない状況に表れている。さらにこの角笛は、たとえ立派な獵師の証として Compson 将軍から受け取ったものであっても、北部へと帰る彼女にとっては何の意味もない代物である。つまりそれは、アイクが荒野で確立した自己に基づく主体が、この時点ではもはや通用しなくなっていることを暗にほめかしているのである。

III

次に、2人目の登場人物、モリーについて考察してみたい。Elisabeth Muhlenfeld が “a masculine novel” (Muhlenfeld 198) と呼ぶ『行け、モーセ』は、ユニスとトマシナという2人の女性奴隷の排除を起源に持つマッキヤスリン家の物語が中心になっている。従って女性の登場人物は、ほとんどの場合十分に描かれないうまま二次的な役割を余儀なくされている。しかし、その中で唯一2つの物語「火と暖炉」(“The Fire and the Hearth”) と「行け、モーセ」(“Go Down, Moses”) に登場することを許されているモリーは、いわば排除された側の代表であり、男性中心的な物語に割って入る力を秘めた重要な人物である。

³⁾ ただし Roberts は、この女性がアイクの世界を脅かす存在であることを認めながらも、彼女が ‘Tragic Mulatta’ のステレオタイプの域を出ないことも指摘している (Roberts 85-86)。

モリーに注目する理由はそれだけではない。主体概念に関する議論の見地からも、彼女は重要な存在である。ポスト構造主義の最大の功績は、統一された主体という概念が隠蔽してきた周縁化のメカニズムを明らかにしたことにある (Michel 90)。しかしまた、いわゆる人間中心的な「主体の死」を宣言したこの議論自体が、大きな危険性を孕んでいることも事実である。その点に関して、Nancy Miller はフェミニズムの立場から以下のように注意を喚起する。“The postmodernist decision that the Author is Dead and the subject along with him ... prematurely forecloses the question of agency for [women]” (Miller 23)。ミラーの指摘を敷衍すると、この「死」の宣告の専らの対象は、自律的主体として世界の中心を占めてきた「人間」(Man) であるということになる。つまり、「主体の死」を宣告するこの議論の盲点は、それまで「他者」として周縁化されてきた側の主体の問題を見落としているということである。従って、白人男性アイクについて考察してきたこの段階で、主体に関する議論をさらに進めるためにも、この周縁に追いやられてきた側を問題にすることが強く求められる。そしてこの場合、黒人女性モリーが南部社会において最も周縁的な立場に置かれているということに疑いの余地はない。

確かに、モリーの夫であるトーミーのタールの息子 Lucas Beauchamp もまた、白人優越社会の中では周縁に追いやられた人物である⁴⁾。しかし、マッキヤスリン家の父方の血を引いていることを常に意識しているルーカスは、黒人としてではなく男性として自己を認識することで、人種的抑圧のシステムから脱しようとする。それは彼の言う次の言葉に端的に表れている。“‘I’m a nigger, But I’m a man too’” (46-7)。従って、現在のマッキヤスリン家の土地の管理者である Roth Edmonds が、ルーカスが仕事を放り出し埋蔵金探しに没頭していることをたしなめにやって来た時も、“‘I’m a man, I’m the man here. I’m the one to say in my house, like you and your paw and his paw were the ones to say in his’” (116) と反論し、自らの家長としての権威を強調するのである。このように、黒人の血を引く彼が、白人男性と変わらず家長の権威を持ち得ることを示す点では、ルーカスは人種差別のシステムを揺るがすことに成功しているかもしれない。しかし一方で、そのために家父長制の論理を利用している点においては、ルーカスの行為は女性というさらなる排除の項を生み出しており、排他的社会構造全体に

⁴⁾ Bernard W. Bell は、社会学的な立場からルーカスを “a marginal man” と定義している (Bell 225)。

対する抵抗としては十分ではない。それどころか、むしろそれを永続させることになっているのである。

一方モリーには、家父長制度の暗黙の共犯者となるルーカスとは異なり、その制度そのものの根底を揺るがすような力の可能性を見いだすことが出来る。それは彼女の名前に暗示されているだろう。もちろん名前と言え、祖父の名にちなんで付けられた 'Lucius' という名前を自ら 'Lucas' と変えたルーカスが思い出される。しかし、白人の祖父の名に手を加え、自らの名付け親になることで自律的主体になろうとするルーカスは、やはりここでも家父長制を利用している。男性であるルーカスには、マッキヤスリン家の白人男性たちと同じ書き手の側に回ることが許されている。反対に、彼らによって台帳に記されたあの2人の黒人女性の名は、白人優越的家父長制度において、女性は常に他者として排除され、書きつけられることで固定化されてきたことを表している。その意味では、モリーも本来ならば書きつけられる側にいるはずだ。しかし、「火と暖炉」において 'Molly' と綴られていた彼女の名が、作品の最後を占める表題作「行け、モーセ」においては 'Mollie' と綴られていることから、一つの綴り字に統一できない名を持つモリーが、文字による固定化を逃れていることは明らかである。つまり、同一の音でありながら異なる綴り字で表記されている彼女の名は、多様なアイデンティティーを持つモリーの存在が、既存の制度では捉えきれないものであることを示している。言い換えれば、多様性を有するモリーは固定化を旨とするこの制度の根幹を揺さぶる最も危険な存在である。だからこそ、彼女は最も周縁に追いやられるのであり、また逆にそこから制度全体に抵抗する主体の可能性が生まれてくるのである。よって以下では、モリーについてさらに具体的な考察を加えてみることにする。

ロバーツも指摘するように、最終的にモリーが黒人の乳母といういわゆる 'Mammy' のステレオタイプを逃れていないということは確かであろう (Roberts 53)。さらに「火と暖炉」において、埋蔵金探しに没頭する夫ルーカスを改心させ、彼らが結婚した日に灯して以来燃え続けている暖炉の火を燃やし続けることに成功するモリーは、「家庭を守る女性」という男性中心的なイデオロギーを内面化しているとさえ言えるかもしれない。しかし、モリーに既存の制度を打破するような力が宿るのは、彼女がこうした制度から逃れようとするのではなく、むしろその内側から切り崩していこうとするからである。この点に関して、グウィンハはモリーの空間的な「移動」に着目しているが (Gwin 92)、ここで特に注目した

いのは、彼女のほとんどの移動の行き先が白人男性のもとであるということである。「火と暖炉」において、モリーは「我が家」(home) からロスのある売店へと歩いて出向き、ルーカスとの離婚を要求する。そして彼女は最終的に離婚の手続きのために、ロスに付き添われ判事を訪れることになる。また「行け、モーセ」においては、行方不明の孫 Samuel Worsham / 通称 Butch を探してもらうために、モリーは町にある弁護士 Gavin Stevens の事務所にわざわざ足を運ぶ。いずれの場合も、彼女が「法」(the Law) に接近しているという点が重要である。この物語が設定されている 1940 年代当時、南部社会が黒人を従属的地位にとどめておくためのいわゆる「ジム・クロウ法」の施行下にあったことを考えれば、南部を覆う法体系全体が白人男性の産物であり、彼らのために制定されたものであるということは明らかである。つまり、法の言説の所有者はまさしく白人男性であり、彼らだけがその言説の主体となることを許されているのだ。それは、モリーがステイヴンスにブッチの搜索を依頼する際に、創世記になぞらえて述べた次の言葉に最も端的に表現されている。“... I dont know whar he is. I just knows Pharaoh got him. And you the Law. I wants to find my boy” (354)。すなわち、モリーにとって彼女を囲い込む法とは、まさしく「彼らの」ものであり、「彼女の」ものではないのである。

そのため、白人優位のこの社会において常に被抑圧者として沈黙させられてきたモリーが法的手段に訴えるためには、抑圧者側であるロスに頼むしかないという矛盾が生じる。にもかかわらず、あえて「法」の元へと近づくモリーの行動は、まさにこの沈黙の他者とされてきた彼女が、彼女自身の声の発話者へと移行する過程を表している。言い換えれば、「我が家」からのモリーの空間的移動は、自らの願望を実現するためだけでなく (“I want to leave Lucas” (98) / “I wants to find my boy” (324))、そもそもこの願望を発話し得る主体の位置に自らを置くためのものなのである。しかしここで注意しなければならないのは、モリーがルーカスのように「彼ら白人の」言説を用いることで「彼らと」同一化しようとしているのではないということである。ロスにルーカスの元を去りたいと告げるモリーは、法律の宣告による別離を意味する「離婚」という言葉を口にすることが出来ない。この言葉は、ロスによって初めて “A divorce?” (98) と言明されるのだ。このようにモリーは、自らを表現するために声を上げるようとする時でさえ、そこにはすでに「彼らの」言葉しかないという厳しい状況に置かれている。しかし、彼女が “I want one of them ... one of them ...” (98) と必死に繰り返す様

子には、自分がすでに「彼らの」言説の中に入り込んでしまっているというその状況を認識した上で、それでもなおその言葉を用いて自らの声を発しようとする彼女の主体の運動が暗示されている。それは、アイクのような排除の構造に基づく自己の概念を前提としているのではない。むしろそれは、彼女が発話するたびにずらされ混じり合う自己と他者との境界線の曖昧さから生まれてくる可変的なものであるといえるだろう。

こうしたモリーの発話主体は、「行け、モーセ」において繰り返しなされる彼女の創世記への言及に最も明確に表れている。「法」と同様、キリスト教が白人の特権的言説であることは、弁護士のスティーブンスが彼の“serious vocation” (353) として旧約聖書を古典ギリシャ語へ逆翻訳するという未だ完成を見ない仕事に22年間も打ち込んでいることに示されているだろう。しかし、キリスト教の源泉に遡ることでその言葉に権威付けをしようとするスティーブンスの行為は、原典であるはずの聖書自体が「翻訳可能である」ことを逆説的に明らかにしている。つまり、彼の未完の翻訳作業は、言葉の意味が本来恣意的なものであることを暴露しているのである。一方、彼の事務所に着くやいなや“Roth Edmonds sold my Benjamin. Sold him in Egypt. Pharaoh got him—” (353) と「詠唱」(chant) し始めるモリーは、権威化された聖書の言葉を用いながらも、それを取り違えることで、逆にその権威的言説を打ち崩すことに成功している。聖書の記述に基づく、もちろんエジプトに売られたのはヤコブの末子ベンジャミンではなく彼の兄ヨセフである (Genesis 37:36)。しかし、モリーは創世記に描かれたこれら二つの物語を混合することで、彼女と孫のブッチの置かれている社会的状況を見事に表現している。言い換えれば、モリーは「彼ら」によって意味付けされた言葉を用いながらも、彼女流の「翻訳」によって、彼女の「創世記」を語り直しているのである。さらに作品全体の表題作でもあるこの短編のタイトルが、有名な黒人霊歌“Go down, Moses, / 'Way down in Egypt's land. / Tell ole Pharaoh, / Let my people go”から取られていることを考えれば、この詠唱を繰り返すモリーは、単にブッチの死に対する「悲しみ」(grief)を表現しているだけでなく、黒人全体の悲しみに満ちた歴史そのものを語り直そうとしていると言えるだろう。そして、スティーヴンスの温情主義によるブッチの盛大な葬儀の後、モリーが新聞の編集長に“I wants hit all in de paper. All of hit” (365) と主張するのは、白人の作り上げてきた歴史において、「歴史がない」(history-less)として利用され排除されてきた黒人を代表して、彼女らの側から語り直した物語

を差し挟む余地を求めていることを示している。字が読めないモリーにとって、この要求を口にすることは彼女がなし得る最大の行為である。また、“Miss Belle will show me whar to look and I can look at hit” (365) という言葉に示された、書かれる内容に対するモリーの無関心さは、彼ら白人による意味付け行為が彼女にとって全く無意味であることを表している。しかしその一方で、文字の占める空間に対する彼女のこだわりは、彼女たちが彼ら白人の歴史から全く除外され不可視の存在にされてきたことに対する抵抗であるとも言えるだろう。

IV

以上『行け、モーセ』における2人の登場人物の主体形成の過程を考察してきたが、最後にフォークナー自身の主体との関係について触れておきたい。先に述べたワINSTAインのように、白人男性作家であるフォークナーをアイクに重ねて考えることは、確かに妥当なことであろう。しかしここで問題にしたいことは、アイクとモリーのうちのどちらがよりフォークナー自身に近い人物像かということではない。強調したいのは、アイクの自律的主体の追求と破綻を描いたこの小説の中に、そうした主体の枠組自体を放棄するようなモリーという人物が含まれているということである。つまり、自己充足的な主体の回復を試みるフォークナーのモダニズム的テキストの周縁に、すでにその主体概念そのものを再考する契機が刻まれているということなのである。

そもそもフォークナーの主体回復の試みは、彼が南部出身者であるということと不可分である。南北戦争以後の南部が、アメリカ史の影としてその表舞台から姿を消されることは周知のことだ。もちろん、南部はアメリカ内部の「他者」として独自の道を歩んではいる。しかしそこには常に、歴史の周縁部分に追いやられてきた地域としての抵抗が伴っていたはずだ。そしてそれは、フォークナーが創作活動を活発にする1930年代に特に顕著なように思われる。歴史家C. Vann Woodwardは、第一次世界大戦後急激に進んだ南部の産業化がその地域的アイデンティティに与えた脅威に言及しつつ、その結果として生まれたAgrarianismの運動を挙げている(Woodward 8)。旧南部の伝統的価値観への回帰を求める1930年のマニフェスト*I'll Take My Stand*に基づくこの運動は、もちろんその後のアメリカ文学のキャンノン形成に大きな役割を果たすNew Criticismへと変貌し

ていくことになるのだが⁵⁾、その運動の原点が、南部独特の地域性を強調することによって産業資本主義の文化的均質化に対して「とりで」(entrenchments)を構築しようとするものであったということは見逃せない。

また、1930年代はヨーロッパにファシズムの暗雲が立ち込める時期でもある。そうした政治的潮流との関連から、Robert H. Brinkmeyer は当時のアメリカにおける南部の位置づけに関して興味深いコメントをしている。彼によると、ヨーロッパの独裁政権の興隆に対して、アメリカは民主主義イデオロギーの元に結集していた。しかし公然と人種差別が行われていた南部が、アメリカ国民にとってファシズムを連想させたことは想像に難くない。プリンクマイヤーはこの点に注目し、当時の南部がアメリカ全体から内なる「他者」として特に強く意識され、その特殊な文化体系が詮索の対象になったことを指摘している (Brinkmeyer 74-7)。

こうした南部の歴史的状況を踏まえると、フォークナーがヨクナパトーファというテキスト上の空間で試みたこととは、彼自身を周縁化する歴史の大きな流れに対する抵抗であったと考えられるのではないだろうか。フォークナーの場合、それは周縁の立場からの脱却、つまりアイクに代表されるような自律的主体の追求として最も力強く表現されている。ただし、その主体概念そのものに内包される矛盾のために、それは永遠に達成されることはない。しかしその一方で、彼のテキストには、周縁からの主体形成の可能性を示唆するモリーのような人物が存在しているのも確かである。フォークナーのテキストが周縁化への抵抗から生み出されたものであるならば、こうした既成の主体概念を再編成する可能性もまた、彼の無意識の抵抗の表れとして捉えることが出来るはずである。たとえフォークナー自身が無自覚であったにせよ、テキストにはすでに現代に通じる主体の有り様の痕跡が残されているのである。それはフォークナーの周縁性の多様な発露の一つであると言えるのではないだろうか。

引用文献

Bell, Bernard W. "William Faulkner's 'Shining Star': Lucas Beauchamp as a Mar-

⁵⁾ 第二次大戦後に突如巻き起こるフォークナーの文学的名声と、それを形成する批評の政治学については Lawrence H. Schwartz の *Creating Faulkner's Reputation: the Politics of Modern Literary Criticism* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1988) に詳しく論じられている。

- ginal Man." *Critical Essays on William Faulkner: The McCaslin Family*. Ed. Arther F. Kinney. Boston: G. K. Hall, 1990. 224-33.
- Brinkmeyer, Jr., Robert H. "Faulkner and the Democratic Crisis." *Faulkner and Ideology: Faulkner and Yoknapatawpha*, 1992. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: University Press of Mississippi, 1995. 70-94.
- Faulkner, William. *Go Down, Moses*. New York: Random House, 1942. Vintage International edition, 1990.
- . *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-62*. Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random House, 1968. Rpt. Lincoln: University of Nebraska Press, 1980.
- Davis, Thadious M. "Crying in the Wilderness: Legal, Racial, and Moral Codes in *Go Down, Moses*." *Critical Essays*. 137-54.
- Gwin, Minrose. "Her Shape, His Hand: The Spaces of African American Women in *Go Down Moses*." *New Essays on Go Down, Moses*. Ed. Linda Wagner-Martin. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. 73-100.
- Michel, Martina. "Positioning the Subject: Locating Postcolonial Studies." *A Review of International English Literature* 26: 1 (January 1995): 83-99.
- Miller, Nancy. "Changing the Subject: Authorship, Writing and the Reader." *What is an Author?* Ed. Maurice Biriotti and Nicola Miller. Manchester: Manchester University Press, 1993. 19-41.
- Muhlenfeld, Elisabeth. "The Distaff Side: The Women of *Go Down, Moses*." *Critical Essays*. 198-218.
- Roberts, Dianna. *Faulkner and Southern Womanhood*. Athens: The University of Georgia Press, 1994.
- Weinstein, Philip M. *Faulkner's Subject: A Cosmos No One Owns*. New York: Cambridge University Press, 1992.
- Woodward, C. Vann. *The Burden of the Southern History*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1960. Revised Edition, 1968.